

「ふるさとづくり大賞」を頂いて

～ 職藝学院が目指すところ～

学校法人 富山国際職藝学園 理事長 稲葉 實



本学院が目指す職藝教育は、まず、人に対するマナーと、掛け替えのない地球に対するマナーをしっかりと身に着けることです。次に、現代社会を席卷してきた偏差値評価にきっぱり決別することです。

これは、すぐれて多様な人間の営みを、多様な価値観で評価するこれからの日本社会に求められる大切な視点です。すなわち、学生がどんな社会人になろうとしているのか、本人の動機と夢を尊重し、学生と教授陣の真摯な対話の中から、プロフェッショナル(職藝人)となるために自発的に鍛錬するよう仕向けてまいります。

モノづくりのプロなら、道具と機械が大半を作ったとしても、発想、準備、仕上げ、メンテナンス、後始末は、人間以外だれもやってくれないことを熟知しています。

このことを現代社会はほとんど忘れかけています。本学院の目指すところは、趣味人の育成でもなく、学者づくりでもありません。専門技能と知識をしっかりと身に着け、二つのマナーをわきまえた職藝人を目指す人々です。

こんなことなど言いながらすでに 22 年の歳月が流れました。その間、IT や IoT などめまぐるしい社会構造の変化にさらされることとなりましたが、ふるさと景観再生を探りつつ一つひとつ積み上げてきた成果がこの度の「ふるさとづくり大賞」になったのでしょうか。

800 有余名の卒業生たちは生涯学生証を携えて、富山県をはじめ全国に巣立って行きました。

「職藝」のシンボルマーク“結”に象徴されます卒業生たちの頼もしい連携が始まっております。年輪と根付きが日本の次代の文化を探りつつ頼もしくふるさと風景再生に挑戦しております。

いよいよ「伝統の未来形」を探りつつ時代の要求にこたえながら、脱皮の時が参りました。手仕事の復権は「人間性の復権」と「地球環境の保全」がテーマとなってきたのです。

科学技術の著しい進歩が多様化をもたらしたとしても、手仕事に期待される人間性の復権と、地球環境の保全は「職藝」という新概念の中に期待されていると信じます。